

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520485

研究課題名（和文） 漢語アクセントの解明と資料の発掘

研究課題名（英文） The historical investigation of pitch accent of the Sino-Japanese and identification of its primary sources

研究代表者

上野 和昭（UENO KAZUAKI）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：10168643

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、歴史的な文献資料と現代の方言資料に基づいて古代から現代へと連続する「漢語アクセント史」を解明することである。古く学習音として受け入れられた漢字音が定着していく過程で、どのように漢語アクセントが形成されていくか、それが和語のアクセントと関係してどのような史の変遷をたどるかを検討した。その結果、「基本アクセント型」の形成、「中低形」（HLH など）回避、前後に接続する自立語や助詞の影響などが漢語アクセント史解明のポイントになることが明らかになってきた。

研究成果の概要（英文）：

The goal of this study is to elucidate the history of pitch accent of the Sino-Japanese vocabulary from Old to Modern Japanese, drawing on the evidence from various historical documents and present-day Japanese dialects. We specifically examined how the accent forms of Sino-Japanese were established through the process whereby the sounds of Chinese words, which had been introduced by learning Chinese language, were incorporated as a part of Japanese phonology. We also examined the historical changes the Sino-Japanese accent underwent under the influence of the accent of native Japanese vocabulary. The results reveal the pivotal role of the factors shaping the history of the accent of Sino-Japanese, including the establishment of the “cardinal accent forms”, the avoidance of the double-peaked form (High-Low-High) and the influence of the (free or bounded) morpheme preceding or following the Sino-Japanese word.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：語構成・音節構造・字音声調・漢音・呉音

1. 研究開始当初の背景

文献による日本語アクセント史の研究は、これまで和語を中心として行われ、アクセント体系の変遷もある程度明らかにされてきた。また、方言アクセントについても多くの情報が蓄積され、これらを総合したアクセント史が構築されようとしていた。

しかし、漢語アクセントについての研究は、主として日本漢字音研究の側から行われてきたので、中世から近世、そして現代へと連続するアクセント史の記述は漢語にまで十分に及んでいないことが多く、またその資料としたものも、多くは仏典・漢籍であって、現代につながる日常漢語を取りあげてきたとは言いがたいものであった。

その一方で、方言に聞かれる漢語アクセントを比較し、文献資料から知られるところも取り入れて、漢語アクセントの東西分派などを説く研究もなされてはいた。しかしこれについても、取り上げられる文献資料は数少なく、史的研究としては物足りないものであった。とくに日常漢語のアクセントとなると十分な研究成果が蓄積されているとは言いがたい状態であった。

2. 研究の目的

本研究では漢語アクセント解明の手を歌集・歌書・物語・軍記・史書・辞書・芸能関係書などにまで延ばし、漢語アクセントの資料を「発掘」して、漢語アクセントデータベースを作成・拡充することを第一の目的とした。

つづいて漢語アクセントの史の変遷を明らかにして、和語のアクセント史とともに総合的に論ずることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、A. 漢語アクセント資料の「発掘」、B. 漢語アクセントデータの整理・公開、C. 「漢語アクセント史」の記述、という三段階から成るものである。

A 段階では、従来なされてきた漢籍・仏典に加えて辞書類はもちろんのこと、歌書・物語・軍記・史書などに対象を広げてデータを採取することとした。

つづいて B 段階では、これをデータベースとして整理し、研究分担者間で共有して、つぎの C 段階（漢語アクセント史の記述）の考察のよりどころとした。

具体的な考察の方法は和語のアクセント史に準じ、拍数・語構成・音節構造などに配慮した。

4. 研究成果

(1) 漢語アクセント史の概観

漢語アクセントの歴史をさぐる立脚点は、原音声調、アクセントの体系変化（以後「体系変化」と呼ぶ）以前の資料、および体系変化後の資料の三つに大別することができる。これら三種の立脚点を通して、和語アクセントの類別に相当する対応が諸方言間にも確認できる語については、すでに金田一春彦、奥村三雄による研究で明らかにされている。

本研究の分析結果からは、たとえば次の語例を、従来の研究成果からも整合的に説明できる例としてあげることができる。

「貢御（ぐご：平平：LL>HL）」「自余（じよ：平去：LH）」「所為（しょゐ：平去：LH）」「衣装（いしょう：平軽平：HLL）」「人馬（じんば：平上：LLH>HLL）」「万機（ばんき：去平軽：LHL/LHF>LHL）」「遠路（ゑんろ：平去：LLH>HLL）」

これらの研究成果から、①語頭 1 拍去声字は体系変化前後を通じ高拍、②語頭 2 拍去声字は体系変化前後を通じ LH を保つ、③語頭に低拍の連続が現れる場合は体系変化後には語頭隆起によって高起式となる、などの現象が確認できる。

複数字から成る漢語のなかには臨時的な結合のために、前部成素のみに字音の伝統性が反映していると解釈される例も目立つ。こうした例は 2 字 4 拍の漢語に多い。

「伝奏（でんそう：平平：LLLL>HLLL）」「別業（べつげふ：入入：LLLL>HLLL）」などの例は、一語としての結合が強ければ LLLL>HHHL の変化が期待されるところであるが、前部成素だけの変化（LL>HL）を反映しているものと解される。

これに対し「人倫（じんりん：平平：LLLL>HHHL）」などは一語として変化しているものである。

非語頭の去声（上昇）については、上声・去声の後接する場合に高平化することが古代語において従来指摘されてきたが、こと中世以降においては低平で現れることも多い。一語のまとまりを示すための、「中低形」の回避には後部成素を低くする方法も確認できた。こうした例は、前部成素のアクセントを活かし後部成素を従属的にする点で、和語の複合語アクセントという接合段階にあると解釈することも可能である。

差声者の独自の解釈や誤りなどを含む場合も、とりわけ和漢混淆文や漢文資料に多数確認された。平家正節や浄瑠璃本などの人口に膾炙した発音とは異なり、学習音が反映し

たかと疑われる資料では、逸脱や学習の弛緩による「音韻史を担わない」差声が現れたものと解釈される。ただしこうした例のなかには基本アクセント型がまぎれこんでいる可能性もあり、今後の分析と検討が必要である。

(2) 漢語アクセントデータベースについて

本研究においては 14 種類の文献を用いて漢語アクセントデータベースを構築した。

以下に文献名を記す(文献番号、略称、文献についての説明、データ数の順に記してある)。

01 古今...古今和歌集声点本諸本。611 データ、

02 和名...和名類聚抄諸本。100 データ、

03 名義...類聚名義抄諸本。96 データ、

04 将門...将門記諸本。楊守敬旧蔵本と真福寺本。49 データ、

05 色前...前田本色葉字類抄。5445 データ、

06 四座...四座講式。元禄版、涅槃講式のみ。946 データ、

07 解文...尾張国郡司百姓等解文諸本。339 データ、

08 宝物...宝物集諸本。119 データ、

09 平家...平家物語諸本。214 データ、

10 正節...平家正節諸本。1606 データ、

11 補忘...補忘記。元禄版。1611 データ、

12 名目...名目抄諸本。814 データ、

13 近松...近松淨瑠璃本。511 データ、

14 中井...中井幸比古『京阪系アクセント辞典』勉誠出版。27479 データ

これらのデータを分析し、総合することによって、以下に記すように「漢語アクセント史」の一端が明らかになってきた。

(3) 古代の漢語アクセントについて

① 古代における、漢語に差された声点とアクセントとの関係は、必ずしも十分には論じられていない。漢籍や仏典に基づく調査では、主として中国語声調との関係において研究の蓄積がなされており、声調と現代方言のアクセント型に一定の対応があることは、金田一春彦・奥村三雄によって明らかにされている。しかしそれらの研究は、対象が現代の日常漢語に限定されてしまい、それ以外の漢語アクセントの史的変遷がよく分からない。そこで、中古から中世にわたる和化漢文や和漢混淆文にあらわれる漢語に差された声点から、漢字声調の「国語化」を探り、漢語アクセントを考える上での基礎的分析を行った。

② 調査・分析の対象とした資料は和化漢文資料として『将門記』(『楊守敬旧蔵本将門記』1058-1080 年頃書写当時加点、『真福寺本将門記』1099 年書写当時加点)・『尾張国郡司百姓等解文』(早稲田大学図書館蔵弘安 4 年(1281) 写本、東京大学史料編纂所蔵応長元年(1311) 写本、真福寺宝生院蔵正中 2 年(1325) 写本)、和漢混淆文資料として『宝物集』(第

二種七卷本系に分類される光長寺本(弘安 10 年[1288] 写)、と久遠寺本(15 世紀末頃写)などの古鈔本)・『平家物語』(大東急記念文庫蔵『延慶本平家物語』)である。

③ 漢語の声調について単字声調の組み合わせとだけ見れば、呉音においては去声+去声、漢音においては去声+去声および上声+去声の声調型で、高さの山が 1 語について 2 箇所に分かれる現象(=「中低形」化)が生じてしまうが、呉音の場合は仏典読誦の中で去声+去声>去声+上声に規則的に変化する。この後、去声字以外に接続する去声字についても、仮名音形 1 拍字に限ってほぼ規則的に上声化する。仮名音形 2 拍字についても上声化するものがある。

漢音の場合においても、語中の去声字が上声化することは報告されている。とりわけ去去>去平、上去>上平のように、後項の去声字が平声化することで「中低形」を回避することが注目される(少なくともこの段階では、呉音と異なるメカニズムが働いていると考えられる)。

和化漢文では、「虜掠」上平/リヨリヤウ[尾張解文早大 016]：上去/リヨリヤウ[色葉 1/075a/7]：上平[将門楊本 32-7]、「熙怡」上平/キイイ[尾張解文東大 212]：上去/キイ[将門真福 5-1]などの例にそのような変化がうかがわれる。また和漢混淆文にも、去去>去平が疑われる「叡念」(去平濁/~テン[延慶平家上 080-05])、また上去>上平が疑われる「懇念」(上平[延慶平家上 537-12])、「史記」(上平/シキ[久遠宝物 1/14a/06])などの例がある。

また、院政期から鎌倉期のころに和語のアクセント体系において去声拍が消滅したことを受け、漢語についても語頭 1 拍去声(上昇調)は消滅して、規則的に上声化した。

④ 漢語アクセントの「中低形」について、資料ごとに観察してみると、将門記(11 世紀)、前田本色葉字類抄上巻(12 世紀)、尾張国解文(13~14 世紀写)、平家物語(14~15 世紀写)、宝物集(15 世紀末写)と時代を下るに連れて、「中低形」が減少することが分かる。また非語頭の去声も減少する。

⑤ 漢語への差声としてどの資料にも一般的に言えるのは、漢語そのものが知識音に由来する以上、伝統性を継承するものそうでないものが含まれるということである。伝統性を継承しない漢語には、同じ漢語であっても学習の弛緩や馴染みの程度の低さのために資料ごとに異なる声点が差されるものがある(離散的・臨時的)。その一方で、「供奉」平濁平濁[熱田平家 06/03b/07]「供奉」平濁平濁[久遠宝物 124]などのように複数資料間で差声の共通する場合もある(集合的・固定的)。後者が漢語アクセントを論じる上での基礎的データとなろう。

(4) 中世の漢語アクセント

① 漢語アクセント史における中世は、とくに和語のそれと異なるどころはなく、その時期も室町時代以後のこととみてよい。和語のアクセント史にいわゆる「体系変化」は、言われるように、漢語のアクセント史における「出合」の現象とよく対応するものである。

すでに桜井茂治『新義真言宗伝『補忘記』の国語学的研究』(桜楓社 1977)で解説されているように、漢語アクセントにおける LLHH > HLLL LLLH > HLLL LLH > HLL のような変化は和語に準ずる。

また『補忘記』(貞享版・元禄版)には「去ト去ト相続スル時ハ下モノ去声ヲ上声ニ之ヲ用ユ」とあり、例示された「真言(去上本濁)《[角徵]徵》」の例などをみると、声点がすでに変化後の様相を呈しているので、この変化は「出合」のアクセント変化以前に、すでに古代アクセントの段階で起きていたものと考えられる。

同様に「上ヨリ去ニ移ル」場合は、大抵は「去声ノ字ヲハ上声ニ用ヒ来ル」(すなわち HH-LH > HH-HH) であるが、稀に「上ミヲ高ク下モヲ平ラニ之ヲ言フ」とあるから HH-LH > HH-LL となることがある。前者の変化はすでに古代において起こっていたが、後者は、それに比すれば新しい傾向であろう。例示された「中臺(上去新濁)《[角徵]徵》」など、そこに付された声点にそのような変化のうかがえないことに注意すべきである。

問題となるのは「平ヨリ平ニ移リ入ヨリ入ニ移ル者共ニ平ラニ之ヲ言フ」とあることで、桜井も言うように声点のみあって節博士のない項目は、そのほとんどが平声と入声の組み合わせの場合であり、桜井は LL > HL LLL > HLL LLLL > HLLL のような変化が漢語にだけ遅れて起こったとして、「出合」に反映したアクセントは、LLH > HLL などの変化の後で、LLL > HLL などの変化の、いまだ起こる前の段階であると結論した。

しかし、〈平平〉〈平入〉〈入平〉〈入入〉は、後接する漢語と一まとまりに発音されたり、助詞「の」が続いたりする場合に、多く高平調になるのであって、「出合」が法則化されるときには、このことに配慮して「平ラニ之ヲ言フ」とした可能性もあるように思われるので、『補忘記』が準拠したのであろう『大疏百条第二重』『釈論百条第二重』と比較してさらに検証する必要がある。

② 『名目抄』では、入声字の多くに平声点が付されている。同じ低平調であることによるものであろう。

漢字二字4拍の漢語に〈平平〉とあるのは、古くそれらの漢字が平声字または入声字であったことをあらわす。その一方で、〈上上〉〈上平〉のような変化型も見られる。『名目抄』には新旧両様に差声されたものが混在し

ている可能性がある。

また、漢字声調から古く LL-LL であったと思われる漢語には、〈上平〉〈上上〉と差声されているものがみられる。前者が HLLL を、後者が HHHH をあらわすのであれば、漢語アクセントの変化の方向を示す可能性がある。

(5) 近世の漢語アクセント

近松浄瑠璃譜本の胡麻章は必ずしもアクセント型を正確に反映せず、対象とする語が高起式であるか低起式であるかしかわからない場合もあるので、語頭についてのみ分析する。

① 1拍に読む呉音去声字が語頭にあらわれる場合、すでに R から H に変化をとげているので、高起式の漢語を作る。(以下、浄瑠璃譜の「上げ胡麻」を U、「下げ胡麻」を D、「平ら胡麻」を S、無譜部分を × であらわす)「無」で始まる例に「無間(むけん <Uxx・UUx>)」「無残(むざん <Uxx>)」「無実(むしつ <Uxx>)」「無常(むじやう <Uxxx・xDxx>)」「無体(むたい <Uxx・UUx>)」「無念(無念 <Uxx>)」「無分別(むぶんべつ <Uxxxx・UUxxx>)」「無用(無用 <UUx>)」「無理(むり <UD・Ux>)」などがあり、ほかに「知音(ちみん <Uxx>)」「持仏(持仏 <Uxx>)」「知恵(ちゑ <Ux・xD>)」「頭巾(づきん・頭巾 <UUx>)」「眉間(みけん <UUU>)」「微塵(みぢん <UUx・UUU>)」「非業(非業(ひごう) <xDD>)」「油煙(ゆゑん <xD>)」などがある。

② 2拍に読む呉音去声字が語頭にある場合には、LH から変化せず低起式のままであるが、近松浄瑠璃譜本でもよく低起式を保っている。

呉音と漢音とで音形の異なる「経(呉音キヤウ・漢音ケイ)」「今(呉音コン・漢音キン)」「生(呉音シャウ・漢音セイ)」「禅(呉音ゼン・漢音セン)」「前(呉音ゼン・漢音セン)」「人(呉音ニン・漢音ジン)」「屏(呉音ビヤウ・漢音ヘイ)」「毎(呉音マイ・漢音バイ)」「文(呉音モン・漢音ブン)」の場合は、呉音形が語頭にあらわれる漢語すべてに低起式の胡麻譜が付けられている。

たとえば「今」を前部成素に持つ「今生(今生・こんじゃう <Dxxx・xUxx>)」「今度(今度・こんど <Dxx>)」「今日(今日 <DUxx>)」「今夜(こんや <SUx>)」のごとくである。これらについては、現代京都・大阪アクセントでもそれぞれ LLLH、LHL、LHLL、LHL であって、低起式アクセントを保っている。

また、「生」を前部成素に持つ「生薑(しやうが <Dxx>)」「生国(生国 <Dxxx・xUxx>)」「生死(生死・しやうじ <DUx・xUx・Uxx>)」「生生世世(生々世々 <Dxxxx>)」などもほとんど低起式アクセントを反映す

る胡麻譜が付けられているけれども、現代では、「生姜」は現代京都・大阪低起式無核の LLH、「生国」は京都 LLLH、大阪 HLLL・HHHH、「生死」は京都アクセントが HLL と HHH の両様であって、必ずしも対応しない。

呉音と漢音とが同音形の場合、それらの漢字を語頭とする漢語に低起式アクセントを反映する胡麻譜だけが現れる例には以下のものがある。

「因果(いんぐは <xUxx>)」現代京都・大阪 LHL だが、大阪若年層は HLL。「縁(えん <DU・Dx・xU>)」現代京都・大阪 LH だが、大阪若年層 HL、「縁者(えん者・ゑんじや <Dxx>)」現代京都・大阪とも HLL—これらは、呉音と漢音が異なる音形の例に比べ、現代京都・大阪で高起式に変わっているものが多いが、近世前期までは伝統的なアクセントを保っていたことがわかる。

(6) 現代京都の漢語アクセント

① ここで現代京都の漢語アクセントと呼ぶのは、中井幸比古 2002『京阪系アクセント辞典』(勉誠出版)と一組をなす別売 CD のフォルダー kyoto に収められている京都ア辞典に収載された漢語アクセントである。この京都ア辞典は、話者 16 名、項目数 14 万を超える(自立語 135,200、付属語・用言の活用形約 8,000)大規模かつ詳細な京都アクセントのデータであるが、現代とはいいながら、2012 年現在からすれば、やや古い京都アクセントということになる。このうち今回対象とした 1 字、2 字の漢語は、ほぼ半数以上の話者が回答した(稀用も含む)約 27,000 語である。

② 現代京都において、ある漢語がとるアクセント型について、以下のようなケースが考えられる。

A 漢字声調からのアクセント型の変化として
B ある時点で「類別語彙」に組み込まれ、「類別語彙」の一つとして

C 漢字の声調などとは無関係に、基本型(所属語数が最大のアクセント型)として

D 漢字の声調などとは無関係に、馴染みのない語がとるアクセント型として

E アクセント型の体系的な変化から外れ、マイナスの意の語のアクセント型として(マイナスの意でとられると低起式に転じるとされる)

F その漢語が省略によって成立した場合、省略語のとるアクセント型として(無核、特に低起無核となるケースが多いとされる)

G その他(数詞関係など、他の語との牽引や反発など)

上記 A が B につながるとすれば、AB は漢語の史的なアクセント変化と認められる。しかし、それ以外は、漢字の元々の声調とは無

関係である。つまり、ある現代漢語が、漢字の声調からの変化として順当なアクセント型であっても、それが史的变化によってそこにたどりついたものか、いったんそれとは切れて、その後別の理由によってそのアクセント型になったのか、中世・近世の資料でたどれないかぎり決められない。

現代京都アクセントの基本型は、1 拍 0 型、2 拍 1 型、3 拍 1 型、4 拍 0 型といわれている(中井 2002 の 18p にも言及あり)。新語・外来語など、すなわち馴染み度の低い語は、普通この基本型をとるといわれる(上記の C と D とは一つにまとめられる)。

つまり、ある漢語のアクセント型が基本型である場合、古代からのアクセント変化(流れ)としてそうである場合と、回答者にとってあまり馴染みがない語であったためそのアクセント型で回答された場合とは混在しているということである。

中井 2002 は、「堅い漢語の単純・癒合名詞」の所属語のもっとも多い型として、2 拍 1 型、3 拍 1 型、4 拍 0 型を挙げる。いずれも先の基本型に一致する。「次いで、以下の型も優勢である」として、2 拍 L0 型、3 拍 0 型、4 拍 1 型を挙げる。「一方、日常的な漢語は、共通語との対応関係が、和語に類似するものがある」と指摘し、2 拍名詞の「類別語彙」に準ずる例を挙げている。

③ 中井の現代京都漢語アクセントのうち、漢字 1 字、2 字の漢語について、おおまかに数えてみると、以下のものであった。

1 字 1 拍漢語は、0 型(H)が圧倒的に多数であり、1 型は「胃・碁」くらい(野洲では 0 型)、L0 型は「絵・字・茶・二」など。

1 字 2 拍漢語では、1 型が 7 割強を占め、0 型が 1 割程度、L0 型が 1 割強、L2 型は極めて少数である。

2 字 2 拍漢語でも、1 型が 6 割程度(1 型と他の型との併用を含めると 8 割)、0 型は 1 割未満、L0 型も 1 割未満(1 型との併用を含めると 2 割以下)、L2 型はやはり極めて少数。

2 字 3 拍(1 拍+2 拍)漢語は、1 型と 1 型を主に他の型も併用を合わせておよそ 2 割、同様に 0 型もしくは 0 型と他との併用が約 1 割。L0 型は 4 割弱(他との併用を含めると 6 割強)、L2 型は極少数。基本型とされる 1 型より L0 型の方がかなり多い。

2 字 3 拍(2 拍+1 拍)漢語は、1 型が 4 割強(他との併用を含めると 6 割強)、0 型は併用を入れても 1 割弱、L0 型は 1 割強(他との併用を含めると 2 割強)、L2 型はかなり少数。「一〜」「六〜」「七〜」「八〜」「十〜」「百〜」に 2 型あり。

2 字 4 拍漢語は、0 型が 6 割強(他との併用を含めるとおよそ 7 割 5 分)、1 型は併用を含めると 1 割弱、L0 型は同じく約 1 割。他の型(2 型、3 型、L2 型、L3 型)はいずれ

も少数である(「数字～」を含む、L2型は「三～」 「千～」が特徴的)。

以上のようになり、中井 2002 の説明と中井の現代京都アクセントのデータとは、3拍については一致しないように思える。2字3拍漢語では、L0型が、基本型とされる1型とほぼ同数であり、特に、1拍+2拍の2字漢語では、L0型が1型を圧倒している。中井の説明が正しいとするなら、大量のL0型の漢語が、「堅い漢語」ではないことになってしまう。

(7) 漢語アクセント史研究の展望

本研究が漢語アクセント史の構築に資するところは、とくに漢語アクセントデータベースの公開にかかるところが大きいであろう。そのためにも早い時期に暫定版をアクセント史資料研究会のホームページに公開する。

もちろん現段階では収載資料がまだ少なく、収録語数も多いとは言えないが、このような作業を通して漢語アクセント史の研究は蓄積されていくものである。本研究は、これに先鞭をつけたものと自負する。

さらにそれぞれの文献資料についても、その資料性が問い直されなければならない。とくに中世以降の声点資料の解釈が慎重でなければならないことは、本研究の指摘するところである。

また近世アクセントと現代アクセントとの関係についても、本研究によってそれらを比較できるだけのデータの蓄積がなされた。「基本型」の形成される時期との関係についても言及できる準備が整ったといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

1. 坂本清恵 長慶天皇の差声法—『仙源抄』の声点をめぐって— 『日本女子大学文学部紀要』61 pp. 41-59 2012 査読無
2. 上野和昭 アクセント仮名遣いと〈音の軽重〉—契沖の仮名遣書の記述をめぐって— 『論集』VII アクセント史資料研究会 pp. 33-49 2011 査読無
3. 上野和昭 『平家正節』にみえる漢語サ変動詞のアクセント 『論集』VI アクセント史資料研究会 pp. 61-80 2010 査読無
4. 坂本清恵 浄瑠璃本の単語認定—仮名の用字と清濁について— 『論集』VI アクセント史資料研究会 pp. 1-24 2010 査読無
5. 鈴木 豊 日本紀講書とアクセント—『日本書紀』声点本の成立に関する考察—

『論集』VI アクセント史資料研究会 pp. 17-42 2010 査読無

6. 加藤大鶴 『宝物集』の漢語声点 『論集』VI アクセント史資料研究会 pp. 43-59 2010 査読無
7. 鈴木 豊 『日本書紀』被訓注字の声点について 『論集』V pp. 1-27 2009 査読無
8. 加藤大鶴 『尾張国郡司百姓等解文』における二字漢語の声点 『論集』V アクセント史資料研究会 pp. 29-51 2009 査読無
9. 坂本清恵 漢語の語構成・音節構造とアクセント 『(新) 明解日本語アクセント辞典』からの報告 (アクセント史資料索引別冊5) アクセント史資料研究会 pp. 42-49 2009 査読無
10. 加藤大鶴 『尾張国郡司百姓等解文』における字音声点 『古典語研究の焦点』武蔵野書院 pp. 931-948 2009 査読無

[学会発表] (計 4 件)

1. 鈴木 豊 The History of Rendaku Reserch —How Lyman's Law has been Received — 1st NINJAL international conference on phonetics and phonology (ICPP2011) 京都大学 2011.12.10
 2. 加藤大鶴 漢語声点の伝統性と非伝統性—和化漢文・和漢混淆文資料と『平家正節』の比較から— アクセント史資料研究会 早稲田大学 2011.9.4
 3. 鈴木 豊 日本紀講書におけるアクセントの取り扱われ方 アクセント史資料研究会 早稲田大学 2010.9.4
 4. 加藤大鶴 漢語アクセント体系の推定—和漢混淆文資料を用いて— アクセント史資料研究会 早稲田大学 2010.9.4
6. 研究組織
- (1) 研究代表者 上野 和昭
(早稲田大学・文学学術院・教授)
研究者番号: 10168643
 - (2) 研究分担者 坂本 清恵
(日本女子大学・文学部・教授)
研究者番号: 50169588
 - (2) 研究分担者 佐藤 栄作
(愛媛大学・教育学部・教授)
研究者番号: 80211275
 - (2) 研究分担者 鈴木 豊
(文京学院大学・外国語学部・教授)
研究者番号: 70216456
 - (2) 研究分担者 加藤 大鶴
(東北文教大学・短期大学部・准教授)
研究者番号: 20318728